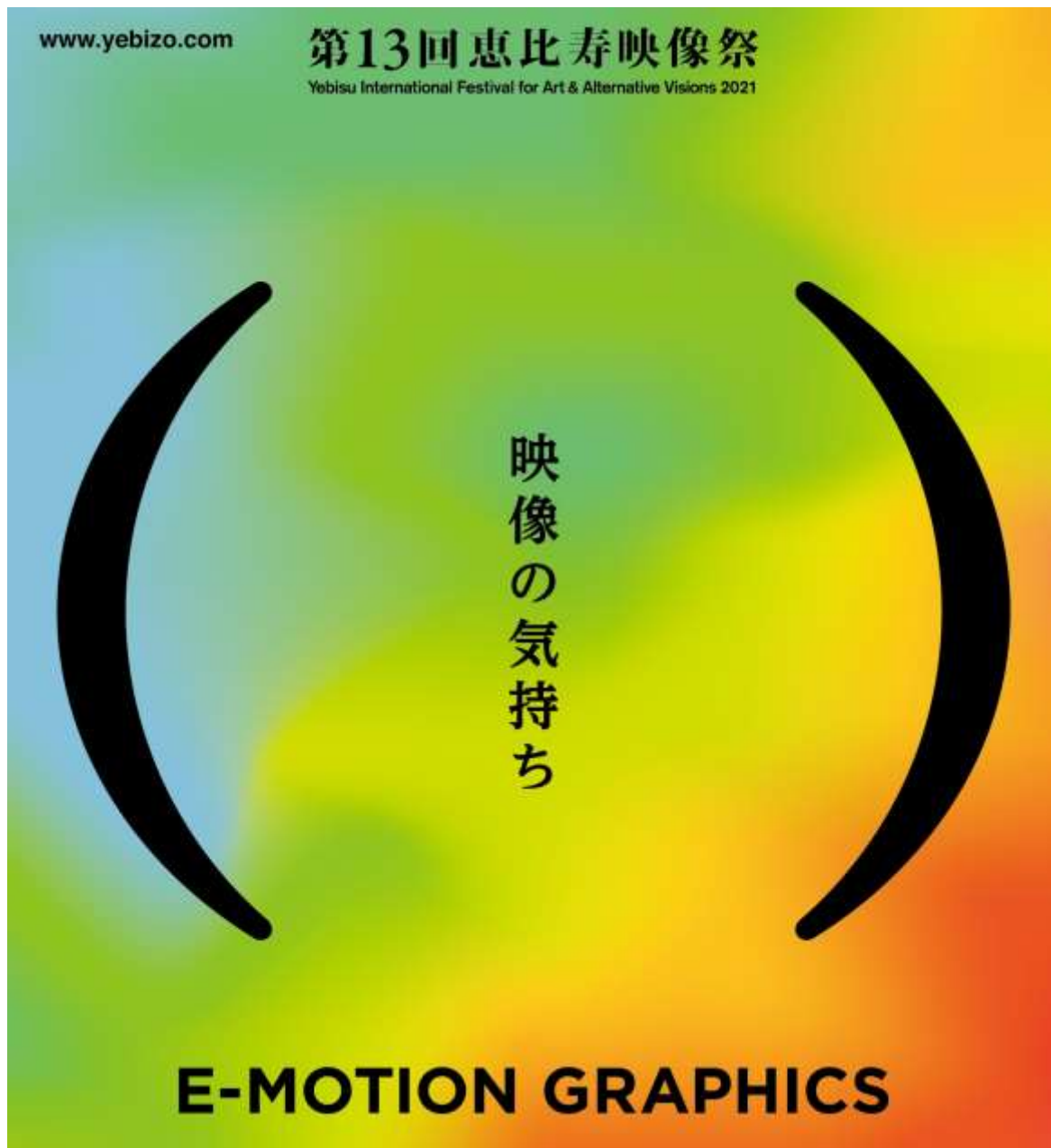


第13回恵比寿映像祭、第2弾発表！
展示（TOP・日仏会館・オフサイト・地域連携）全決定！



令和3（2021）年2月5日（金）～2月21日（日）

《15日間》月曜休館／10:00～20:00 ※最終日は18:00まで

会場 | 東京都写真美術館／日仏会館／ザ・ガーデンルーム／

恵比寿ガーデンプレイス センター広場／地域連携各所 ほか

入場無料

※定員制のプログラムは有料

開催概要

恵比寿映像祭は、平成21（2009）年の第1回開催以来、年に一度恵比寿の地で、展示、上映、パフォーマンス、トーク・セッションなどを複合的かつ、領域横断的に紹介する映像とアートの国際フェスティバルです。映像分野における創造活動の活性化と、映像表現やメディアの発展をいかに育み、継承していくかという課題について広く共有する場となることを目指してきました。第13回開催となる今回は、「動画」であるということ、に焦点をあて、歴史的な作品も参照しながら、映像の楽しみ方を広げるテーマを掲げました。これまでに培った地域とのつながりや国際的なネットワークを支えに、さらなる充実と発展をはかります。

〔名称〕 第13回恵比寿映像祭「映像の気持ち」

Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions 2021:
E-MOTION GRAPHICS

〔会期〕 令和3（2021）年2月5日（金）～2月21日（日）《15日間》月曜休館

〔時間〕 10:00～20:00 ※最終日は18:00まで

〔会場〕 東京都写真美術館／日仏会館／ザ・ガーデンルーム／
恵比寿ガーデンプレイス センター広場／地域連携各所 ほか

〔料金〕 入場無料 ※定員制のプログラムは有料

〔主催〕 東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館・アーツカウンシル東京／
日本経済新聞社

〔共催〕 サッポロ不動産開発株式会社／公益財団法人日仏会館

〔後援〕 米国大使館／駐日韓国大使館 韓国文化院／TBS／J-WAVE 81.3FM

〔協賛〕 サッポロビール株式会社

〔協力〕 avatarin株式会社／ANA

〔公式HP〕 www.yebizo.com

〔公式SNS〕 Twitter: <https://twitter.com/topmuseum/>

Instagram: <https://www.instagram.com/yebizo/>

恵比寿映像祭のミッション

映像文化の創造と紹介・体感の場としてのフェスティバル

恵比寿映像祭は、映像領域と芸術領域を横断するフェスティバルとして、2008年度（2009年2月）より開催され、今年度で13回目を迎えます。文化都市東京・恵比寿から発信するフェスティバルとして、東京都写真美術館の全フロア、恵比寿ガーデンプレイスおよび地域に広がる文化施設と共に開催しています。映画、アニメーション、実験映像、ドキュメンタリー、現代美術ほか、多様なジャンルの映像芸術表現が一堂に揃います。

この恵比寿映像祭のロゴマークのカッコが象徴するのは、さまざまな映像をカッコの中に入れて、皆で考えてみよう！という姿勢です。

1 映像文化を紹介・体感する

多くの人々が多様な映像芸術表現に触れる「開かれた」
機会（豊かな感性を育む機能）

2 映像文化を創造する

新進作家の発掘・支援（作家の跳躍台としての機能）

3 映像文化の楽しさに出会う

フェスティバルを通じて映像文化の楽しさに出会い
ジャンルや地域の垣根を越え交流



恵比寿映像祭
Yebisu International Festival for
Art & Alternative Visions

第13回恵比寿映像祭 映像の気持ち

Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions 2021 E-MOTION GRAPHICS

映像（動画）は、テレビ画面、スマートフォン、街中や車内の広告ディスプレイ、ゲーム、自動販売機、あるいはウェアラブルな端末など、21世紀の都市生活のいたるところにあふれています。明滅する光に過ぎない映像を前に、わたしたちは、笑ったり、泣いたり、驚いたり、怒りや欲望を喚起されたり、触れられないものや行くことができない場所へ思いをはせたり…と気持ちを動かされています。さらに世界的なパンデミックを契機に、物理的な移動や直接的な交流の代替手段のひとつとして、動画配信や映像を介した遠隔コミュニケーションの普及が加速し、映像との付き合い方はさらに拡がりを見せています。

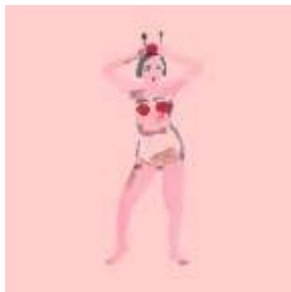
第13回恵比寿映像祭では、見る人の感情を動かす映像の力に着目し、あらためて、「動画」であるということ、について向き合いたいと思います。静止画が動き出すことそのものに驚き目を見張った映画前史の時代から、アナログからデジタルへ、平面から3D空間へ、技術の変遷やメディアの多様化とともに、動画表現はさまざまに変化を遂げ多様になってきました。さまざまな工夫により編み出されてきた動画表現の原理とその歴史を参照しつつ、映像（動画）の魅力を楽しむ手がかりを提示し、さらなる拡張を続ける同時代の映像のありかたと、あたりまえのように映像とともに生きる現在を見つめなおす機会をつくります。

第13回恵比寿映像祭アーティスティック・ディレクター 岡村恵子

映像には見る人の感情を動かす力がある。
私たちを取り囲むさまざまな動画表現の成り立ちや違いをひもときながら、
映像とのつきあい方を考えていきます。

● 動画表現の成り立ち

今日私たちの身の周りにある映像は実に多様です。それらの表現を成り立たせるまでには、さまざまな工夫の歴史がありました。同時代の映像表現を紹介しながら、そのもととなる技法を、先駆的な作品とともに参照することで、わかりやすく動画表現の成り立ちをひもときます。



(左) リュミエール兄弟（オーギュスト・リュミエール
&ルイ・リュミエール）《リュミエール社作品集》
1895年頃／東京都写真美術館蔵

(右) シヤマザキ《とにかくなにかをはじめよう》
2020年／作家蔵

● 映像（動画）の質感

見る人の気持ちを左右する映像の質感にはどんな違いがあるのでしょうか？ドローイングで表現された動きは、手業の朴訥さならではの情感を持ちます。機械の介在によって実現される表現にも、それぞれの美学や思想が託されています。



(左) ジョン・ホイットニー《Matrix Ⅲ》1972年
©The artist and Whitney Editions™, Los Angeles, CA
(右) チョ・ヨンガク《道路は流星のように》
2019年／作家蔵〔参考図版〕

● 映像の作用／ 映像による擬人化

動画が用いられることによって、無機質なものが、まるで生きているかのように感じることがあります。映像によって、現実と虚構、自然と人工、人と人でないもの——その淡いが浮き彫りにされます。



(左) 筑波大学ヒューマンエージェントインタラク
ション研究室(後藤豪臣、大澤博隆)「Agency
Glass: 視線によるコミュニケーションを支援する
ウェアラブルデバイスの開発と評価」2014-2020年
[参考図版]

(右) トニー・アスラー《1, 2, 3》1996年
／東京都現代美術館蔵

● 映像とともに
生きる現在（いま）

現在若手作家の中には、オンライン上での作品発表を入口に活動を飛躍させる人が増えています。現実空間と仮想空間が錯綜するAR（拡張現実）や、オンライン上で簡単に操作や加工が可能となった動画技術など、情報技術の汎用化とともに広がる新たな映像とのつきあい方について考えます。



(左) 赤松正行+ARARTプロジェクト《ウロボロスのトーチ》
2012年／作家蔵〔参考図版〕
(右) ペトラ・コートライト《sssss////////^^^ ^^ ^^》
2011年／作家蔵〔参考図版〕

第13回恵比寿映像祭「映像の気持ち」の第2弾情報として、展示（TOP・日仏会館・オフサイト・地域連携）全決定！詳細を発表いたします。

● WOWによる「光と影」による映像のモニュメントが、恵比寿ガーデンプレイスに出現！

恵比寿ガーデンプレイスセンター広場には、光と影が織りなす映像のモニュメントを展示いたします。

日頃から私たちは、映画館やテレビのスクリーン、あるいはパソコンや各種のモバイル端末の画面、街中のデジタルサイネージ広告など、そこかしこに溢れる映像に囲まれています。そうした映像の多くは声高に私たちの目を惹きつけようとするものですが、このモニュメントの表面に現れる映像は、間接的な光（照明）と、その光によって生まれる影の表情によって描きだされるものです。映像インタラクションのエリアでは、人の動きに応答するようにアニメーションが反応し、対話を生み出します。

真冬の恵比寿ガーデンプレイスに現れる光と影のモニュメントを見て、心とカラダに染み入る映像体験をお楽しみください。



WOW《モーション・モダリティ溶けた映像のモニュメント》
[参考図版]

● 一見すると写真のよう。精巧な3DCG表現の可能性を探究してきた渡辺豪による最新展示！

かつてのライブラリー・スペースを改装して作られた日仏会館2階のギャラリーでは、渡辺豪の映像インスタレーションの展示を行います。渡辺は、3DCGを用いた作品の可能性を探究し、時間と空間の現実認識を問う、挑戦的な表現を生み出してきたアーティストです。

出品作は、自室に積みあげられた書籍を1冊ずつ3DCGに描き起こして再構成したアニメーション。大画面に映し出されるそれぞれの本が、渡辺が生活のなかで採取したという、屋内外のさまざまな異なる光源によって浮かび上がります。2020年に発表された作品を恵比寿版として展示いたします。



渡辺豪《積み上げられた本》2019-2020年 [参考図版]
「停滞フィールド」展（トーキョーアーツアンドスペース本郷、2020）より
撮影：加藤健 画像提供：Tokyo Arts and Space

● 地域連携プログラムを開始して、10年目。今年も恵比寿を舞台に、地域の担い手文化施設やギャラリーが、映像祭テーマにちなんだプログラムを決定！

恵比寿映像祭では、このフェスティバルの主旨に賛同していただいた地域の文化の担い手たちとプログラムを連携しています。今年も、小瀬村真美、大岩オスカル、かじおかみほ、ウィスット・ボンニミットほか、多彩な作家たちが紹介されます。映像インスタレーションあり、写真あり、ドローイングあり、映画あり、オンライン企画ありと多彩なプログラムが揃いました。地域を巡るシールラリーも実施します！ぜひ、街めぐりしながら、お楽しみください。



日 仏 会 館



ART FRONT GALLERY



NADIFT a/p/a/r/t



Rocky Shore



YEBISU GARDEN CINEMA



V A I T



MuCuL



AL



MA2 Gallery



TRAUMARIS

- **さまざまな映像表現の成り立ちが一堂に会す「展示」の、全出品アーティストを発表。**
- **3DCGの表現力を駆使したカワイオカムラや渡辺豪。新たな表現技術を軽やかに使いこなす新世代のアーティスト、韓国のチョ・ヨンガク、欧州を拠点とするユニットKEIKENなどを日本初紹介。**

総合テーマ「映像の気持ち」のもと、さまざまな映像の技法が生み出す、多様な表現形式の作品群を紹介します。

関西を拠点に活躍する異才ユニット、カワイオカムラの最新作で、フル3DCGアニメーションによって独特の映像世界を作り出した《ムード・ホール》のインスタレーション展示を行います。同作は、その映画版が、アニメトウ国際アニメーション映画祭 2019でエクスペリメンタルフィルム（Lab）部門最優秀作品賞を受賞しています。

日仏会館でも近作を恵比寿版にアレンジしたインスタレーションを発表する渡辺豪は、実写データと3DCGによる仮構の映像ポートレート《Aevum》を今回初めて4K画質で展示します。

その他にも、実写の風景を機械学習によって加工した作品で国際的にも注目されている韓国のチョ・ヨンガクや、欧州を拠点にVR（仮想現実）やAR（拡張現実）といった新しい技法を軽やかに使いこなすアーティストユニットKEIKENなど、新しい世代のアーティストを日本初紹介します。



カワイオカムラ《ムード・ホール》2019年 [参考図版]



(左) 渡辺豪《Aevum》2009-2012年 / タグチ・アート・コレクション蔵
©Go Watanabe, Courtesy of ANOMALY
(右) KEIKEN《拡張されたメイクアップ講座》2020年 [参考図版]
委嘱：FACT Liverpool

- **まさに映像の温故知新——古典的な作品との新鮮な出会いを通じて動画表現の歴史を体感。映画やアニメーションの始まりを知るコレクションや、コンピューターグラフィックスの黎明期に生まれた名作などを、現代の作品とあわせて紹介します。**

表現技法とその歴史の参照点となる古典的な名作と、現代のアーティストによる作品とを合わせて展示。原点となる作品との新鮮な出会いによって、動画の持つ魅力を楽しみながら感じる機会を提供します。
東京都写真美術館の映像コレクションからは、動画の成り立ちをたどる映像装置や、映画の始まりともいえるリュミエール兄弟のフィルム、エミール・コールによる黎明期の愛らしいアニメーションなどをセレクトしました。

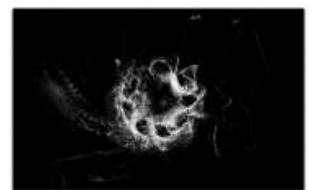
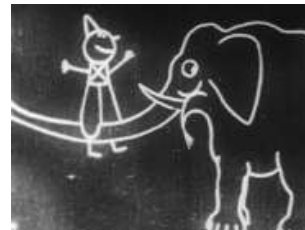
他にも、兄弟ともに、コンピュータ・グラフィックスの先駆者として知られるジェームズ・ホイットニーとジョン・ホイットニーの代表作など、知っておきたい古典的名作を、現代の作品と対話するように展示します。

(左上) エミール・コール《ファンタスマゴリー》1908年
東京都写真美術館蔵

(左下) スタン・ヴァンダービーク《ポエム・フィールド No.2》1966年
配給：Electronic Arts Intermix (E.A.I.)

(右上) 木本圭子《Imaginary・Numbers 2006》2006年
作家蔵

(右下) ジェームズ・ホイットニー《Lapis》1966年
©Whitney Editions™, Los Angeles, CA

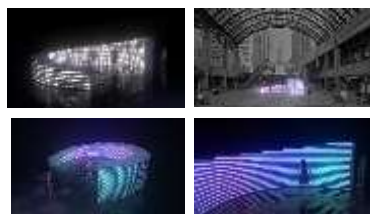


オフサイト展示 | 恵比寿ガーデンプレイス センター広場

WOW 《モーション・モダリティ 溶けた映像のモニュメント》



WOW 《モーション・モダリティ 溶けた映像のモニュメント》 [参考図版]



風景に溶け込む「光と影」による映像のモニュメント

日常に映像があふれかえる現代。明滅する光で人々の関心を喚起し、声高に情報を訴える映像が多いなか、公共空間における映像のあり方を模索するプロジェクト。立体彫刻の表面と一体化した「光と影」による映像が、風景に溶け込み、見る人を包み込みます。

四角い平面である映像から自由な形の映像へ、強く発光し目に直接入る映像から物質を介して光が回り込む柔らかな映像へ、高解像度の鮮明な映像から解像度に依存しない曖昧な映像へ——。「溶けた映像」は、自由な形となって空間/物質に馴染み、光の反射と影が柔らかく混ざり合っていくなかで、環境の一部になるかのような佇まいを持ちます。刻々と移り変わる夕暮れの雰囲気や、雲の状態、夏の揺れる木漏れ日など、自然現象に似た様相をこのモニュメントは創り出します。

WOW

東京、仙台、ロンドン、サンフランシスコに拠点を置くビジュアルデザインスタジオ。CMやコンセプト映像など、広告における多様な映像表現から、さまざまな空間におけるインスタレーション映像演出、メーカーと共同で開発するユーザーインターフェイスデザインまで、既存のメディアやカテゴリーにとらわれない、幅広いデザインワークをおこなっている。さらに、最近では積極的にオリジナルのアート作品やプロダクトを制作し、国内外でインスタレーションを多数実施。作り手個人の感性を最大限に引き出しながら、ビジュアルデザインの社会的機能を果たすべく、映像の新しい可能性を追求し続けている。

URL : www.w0w.co.jp

展示 | 日仏会館ギャラリー

渡辺豪 《積み上げられた本》



渡辺豪《積み上げられた本》2019-2020年 [参考図版]
／「停滞フィールド」展（トーキョーアーツアンドスペース本郷、2020）より
撮影：加藤健
画像提供：Tokyo Arts and Space

渡辺豪は、大学院在籍中より3DCGを用いた作品の可能性を探求し、時間と空間の現実認識を問う、挑戦的な表現を生み出してきた。第13回恵比寿映像祭では、本館で紹介される、3DCGで作成した顔にヒトの皮膚画像を貼り付けた初期代表作「フェイス」シリーズに加え、渡辺が数年前から取り組んでいる、身の回りにあるモノを対象にしたインスタレーション作品《積み上げられた本》を日仏会館ギャラリーの空間にあわせ再制作する。



渡辺豪 WATANABE Go

1975年兵庫県生まれ、東京都在住。2002年、3DCGで作成した顔にヒトの皮膚画像を貼り付けた作品《フェイス》を発表。同じ3Dモデルをベースにさまざまなヒトの皮膚画像を当て嵌めた、「フェイス（ポートレート）」シリーズを展開する。数年前より、モチーフを作家自身の身の回りにある本や食器、部屋などへと移し、物質・光学的な法則から離れた変化や動きをみせるアニメーションを制作。自らが何を見ているのかを私たちに静かに問いかける。

展示 | 東京都写真美術館 3F・2F・B1F展示室

ペトラ・コートライト Petra CORTRIGHT



《sssss////////^^^ ^^ ^^》

2011年／作家蔵 [参考図版]

ペトラ・コートライトは、2000年代よりネット上を表現活動の場とし、加工したセルフィーなどのビデオを発表。その作品はYoutubeにおけるささやかな感情表現をとらえた視覚的な詩のようである。

● リュミエール兄弟 (オーギュスト・リュミエール&ルイ・リュミエール) The LUMIÈRE Brothers (Auguste and Louis LUMIÈRE)

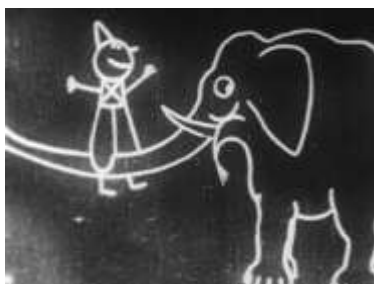


《リュミエール社作品集》

1895年頃／東京都写真美術館蔵

リュミエール兄弟は、世界初の映画撮影・映写機であるシネマトグラフの発明により、トーマス・エジソンと並び「映画の父」と呼ばれている。19世紀末に撮られた彼らの最初期の作品集には、現在のインターネット動画投稿に見られる映像の原型が既に詰め込まれている。

● エミール・コール Émile COHL



《ファンタスマゴリー》

1908年／東京都写真美術館蔵

フィルムを媒体とするアニメーション作品としては最初期のもの。700枚もの手描きの原画を撮影して製作された。元々風刺画家や漫画家として活躍していたコールの想像力が発揮され、手書きの線画が1コマごとに、自由自在に変形していく。

松本力 MATSUMOTO Chikara



《宇宙登山》原画

2006年／作家蔵

小さなドローイングに透過光を加え、一コマずつビデオ撮影することで、絵による映像表現を追求。「パラパラ漫画」の原理を用いた手描きアニメーションならではの動きが、豊かな抒情性を湛える。

展示 | 東京都写真美術館 3F・2F・B1F展示室

● マックス・フライシャー Max FLEISCHER

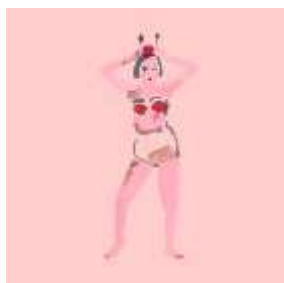


《ベティ・ブープの白雪姫》

1933年／©Paramount Pictures

マックス・フライシャーは、1917年に、実写映像をアニメーションに変換する「ロトスコープ」技術を発明し、キャラクターの動きに新たな命を吹き込んだ。本作は、アフリカ系アメリカ人のジャズシンガー、キャブ・キャロウェイによる魅惑的なステップを、ロトスコープした幽霊のシーンが特に秀逸な1933年の作例である。

シシヤマザキ ShiShiYAMAZAKI



《とにかくなにかをはじめよう》

2020年／作家蔵

オリジナル作品の発表とともに、国内外の一流ブランドからPV制作依頼も相次ぐ気鋭の作家。自撮りした動きを、ピンク色の多用が特徴的な水彩画風のドローイングに変換し、リズミカルなアニメーションを生み出す。

● チャンヨンヘ重工業 YOUNG-HAE CHANG HEAVY INDUSTRIES



《ソウ ソウ ソウルフル》

2006年／東京都写真美術館蔵

軽妙な音楽にあわせて、次々とリズミカルに映し出されるテロップが特徴的な2人組ユニット、チャンヨンヘ重工業の作品は、シンプルな動きがいかに雄弁にもなりうるかを示す。第1回恵比寿映像祭参加を経て東京都写真美術館のコレクションに加わった作品を展示する。

● スタン・ヴァンダービーク Stan VANDERBEEK



《ポエム・フィールド No.2》

1966年／配給：Electronic Arts Intermix (E.A.I.)

コンピューターによって可能になった映像の先駆例。1963年に開発されたコンピューターのプログラミング言語BEFLIXを利用し、アニメーション・実験映画作家のヴァンダービークが開発者ケネス・ノールトンと協働して制作した、断片的な言葉と幾何学的なパターンによるアニメーション。

展示 | 東京都写真美術館 3F・2F・B1F展示室

赤松正行+ARARTプロジェクト AKAMATSU Masayuki+ARART Project



《ウロボロスのトーチ》

2012年／作家蔵 [参考図版]

拡張現実（Augmented Reality）による新たな体験を提案してきた赤松正行+ARARTプロジェクト。パネルや立方体に描かれた絵画に携帯端末をかざして鑑賞する展示によって別の現実を浮かび上がらせる。

トニー・アウスラー Tony OURSLER



《1, 2, 3》

1996年／東京都現代美術館蔵

1970年代半ば以降、マルチメディア・アーティストとして活躍し、今や世界的なアーティストであるトニー・アウスラー。小型プロジェクターの汎用化を受け、いち早く立体物への動画投影を試みた1990年代半ばの先駆的な作例を紹介する。

- 筑波大学ヒューマンエージェントインタラクション研究室（後藤豪臣、大澤博隆）
Human-agent Interaction Laboratory, Tsukuba University
(GOTO Takeomi, OSAWA Hirotaka)



「Agency Glass : 視線によるコミュニケーションを支援するウェアラブルデバイスの開発と評価」

2014-2020年 [参考図版]

対人コミュニケーションにおいて、非言語情報は互いの感情や意図を理解するうえで重要な要素であり、そのひとつに視線が挙げられる。視線コミュニケーションを行うことが難しい人を対象とした支援デバイス Agency Glass の開発に関わる研究を紹介する。

渡辺豪 WATANABE Go



《Aevum》

2009-2012年／タグチ・アート・コレクション蔵
©Go Watanabe, Courtesy of ANOMALY

学生時代から3DCGによる制作の可能性を探究してきた渡辺豪。実在のモデルの皮膚画像を貼り合わせて作られた、誰かでありながら誰でもない匿名の肖像。

展示 | 東京都写真美術館 3F・2F・B1F展示室

● ジェームズ・ホイットニー James WHITNEY



《Lapis》

1966年

©The artist and Whitney Editions™, Los Angeles, CA

抽象アニメーションの古典的名作。兄のジョン・ホイットニー開発による制御システムを用い、無数の光の点を個別に回転させながら多重露光撮影で増殖させることで、めくるめく色と光、その残像が織りなす瞑想的な映像の曼陀羅を生み出した。

● ジョン・ホイットニー John WHITNEY



《Matrix III》

1972年

©The artist and Whitney Editions™, Los Angeles, CA

技術的な探究を重ねたジョン・ホイットニーは、弟ジェームズとともに抽象アニメーションとコンピュータ・グラフィックスの発展に大きく貢献した。幾何学的な図形が目に見えない基盤（マトリクス）上で多様なパターンを描く映像。音楽はテリー・ライリーが担当。

木本圭子 KIMOTO Keiko



《Imaginary Numbers 2006》

2006年／作家蔵

数理アルゴリズムを用いたアニメーション表現を独学で探究。言葉で理解するのではなく、身体感覚を刺激される映像を手掛けてきた。

● 藤堂高行 TODO Takayuki



《SEER》

2018-2021年／作家蔵

「シミュレートされた感情表現ロボット」と題された出品作品は、小さなロボットの頭部。このロボットは、見つめる相手を認識し、視線を合わせるだけでなく、その表情を、繊細な頭の傾き、目、まぶた、眉毛の動きで写し取る。

展示 | 東京都写真美術館 3F・2F・B1F展示室

チョ・ヨンガク CHO Youngkak



《道路は流星のように》

2019年／作家蔵 [参考図版]

これまでもAIによるディープ・ラーニングの技術などを用い、テクノロジーと共存する現代社会を作品化してきたチョ・ヨンガク。出品作品では、都市の道路のイメージを機械学習によって、風変わりな風景に変える。

● KEIKEN



《拡張されたメイクアップ講座》

2020年／ [参考図版] 委嘱 : FACT Liverpool

ロンドンとベルリンを拠点にVR（仮想現実）やAR（拡張現実）、パフォーマンス、ゲームエンジンなどを介して、現在そして未来の新たな姿をフィクションとして描き出す多次元的な活動を行っているコレクティブ。チーム名は日本語の「経験」に由来。今回は、Instagramのフェイスフィルターを用いたプロジェクト他を紹介する。

カワイオカムラ KAWAI+OKAMURA



《ムード・ホール》

2019年／作家蔵 [参考図版]

3DCGアニメーションによって独特の映像世界を作り出してきた異才ユニット、カワイオカムラ。最新作《ムード・ホール》の世界を、展示と上映で東京初公開。

YEBIZO MEETS 地域連携プログラム（展示ほか）

（営業日、時間は変更になる場合がございます。変更の際は各施設のHPでお知らせいたします。）

1 日仏会館

映像と講演 映画と文学 VIII

感動が生まれるところ——文学と映画、そして『女の一生』

自然主義を代表する小説のひとつ、モーパッサンの『女の一生』は、長い年月を経たのちにふたつの映画化を生みました。19世紀末に生きたひとりの女性の生を描いた小説の感動はどこにある／あったのか、どこから生まれるのか、たどり直してみたいと思います。

日時：令和3年2月19日（金）18:30～

会場：日仏会館ホール | 東京都渋谷区恵比寿3-9-25

入場：一般 1,000円、学生 500円 * 要事前予約

TEL：03-5424-1141

www.mfjtokyo.or.jp

主催：（公財）日仏会館、TMF日仏メディア交流協会



2 YEBISU GARDEN CINEMA

『わたしの叔父さん』

第32回東京国際映画祭グランプリに輝いたヒューマンドラマ。

幼い頃に家族を失くし、足の不自由な叔父と暮らす27歳のクリス。将来の夢と恋に悩むクリスの葛藤に気付いた叔父は、姪の幸せを静かに後押しするが…。

家族の愛の形と人生の選択を描く感動の物語。

日時：令和3年1月29日（金）より公開

会場：YEBISU GARDEN CINEMA | 東京都渋谷区恵比寿4-20-2

恵比寿ガーデンプレイス内

入場：一般 1,800円、大学生 1,500円、シニア（60歳以上） 1,200円、

高校生以下 1,000円

休日：無し

TEL：0570-783-715

www.unitedcinemas.jp/yebisu



3 MA 2 Gallery

映像の気持ち - E-MOTION GRAPHICS

小瀬村真美 × 三宅砂織

古典絵画の構図を応用し、時代を超えて表現されるもの、感じ取られるものを問いかける小瀬村真美。人々の眼差しに時代を超えて内在する「絵画的な像」を多声的に抽出する試みを展開している三宅砂織。写真と映像の両方を熟考し作品に昇華させる2人の展覧会。

日時：令和3年2月4日（木）～2月27日（土）12:00-19:00

会場：MA2 Gallery | 東京都渋谷区恵比寿3-3-8

入場：無料

休日：月曜日

TEL：03-3444-1133

www.ma2gallery.com

MA 2 Gallery

YEBIZO MEETS 地域連携プログラム

4 MuCuL (ミュウカル)

佐藤慶子《水ゆら》

人類が初めて自分の姿を認識したとき、それは水面＝水鏡に映る自己を見た瞬間。この水鏡を人類が初めて触れた映像スクリーンと捉え、かつての人々もそうしたように、その中に映りこむ様々なものを眺めながら悠久なる時間の流れに思いを巡らせる作品です。

日時：令和3年2月5日（金）—2月21日（日） 13:30-18:30
会場：MuCuL（ミュウカル） | 東京都渋谷区恵比寿2-21-3（ギャラリー工房親裏）
入場：無料 | 2月アーティストパフォーマンス&トーク。その他HP参照
休日：月／火曜日
TEL：03-3446-2618 | www.e-mucul.com



5 NADiff Gallery

かじおかみほ Do you open your eyes in the water?

自身で現像したゼラチンシルバークラウドプリントで、美しく本能的な写真作品を作りだすかじおかみほ。海外で高く評価されており2019年には日本人初の仏ナダール賞を受賞しています。作家の日本初の個展となる本展では、2014年からの作品をシリーズごとに紹介します。

日時：令和3年2月5日（金）—2月28日（日） 13:00-19:00
会場：NADiff Gallery | 東京都渋谷区恵比寿1-18-4 NADiff A/P/A/R/T B1F
入場：無料
休日：月／火／水曜日
TEL: 03-3446-4977 | www.nadiff.com



6 MEM

網膜反転侵犯
小松浩子 × 立川清志楼

二人の作家による映像インスタレーション、および、会期中の両作家のいままでの映像作品のまとまった上映会を予定。

日時：令和3年2月4日（木）—2月21日（日） 12:00-20:00
会場：MEM | 東京都渋谷区恵比寿1-18-4 NADiff A/P/A/R/T 3F
入場：無料（上映会は別途有料）
休日：月曜日 | 祝日の場合はその翌日
TEL: 03-6459-3205 | www.mem-inc.jp



7 AL | TRAUMARIS

Emotional Rescue — 池田光宏 高田冬彦 ウィスット・ボンニミット

北欧の気象のように光の色により変容するイメージ。窃視者さえも仕組まれた極私的儀式。無常観を綴る手描きアニメーション。独自の映像表現がおのずと情動をもたらす3作家の作品世界に注目する。会期中は会場とオンラインでパフォーマンスやトークを開催。

日時：令和3年2月5日（金）—2月14日（日） 11:00-19:00（最終日は17:00まで）
会場 AL | 東京都渋谷区恵比寿南3-7-17
入場：無料（イベントは別途チャージ、オンラインは投げ銭制）
企画：住吉智恵 [TRAUMARIS]
TEL: 03-5722-9799 | www.al-tokyo.jp



YEBIZO MEETS 地域連携プログラム

8 特定非営利活動法人アーツイニシアティヴトウキョウ[AIT/エイト]

「アクティヴィズムとしての写真表現」ザネレ・ムホリを紐解く

テート・モダンで展覧会開催中の南アフリカのヴィジュアル・アクティヴィスト、ザネレ・ムホリ。様々な差別やヘイトクライムを経験してきた黒人LGBTQIA+の人々のポートレートを通じて社会の意識変革に取り組む。展覧会のキュレーター、中森康文氏に聞く。



日時：令和3年2月13日（土） 19:00-20:30

会場：＊オンライン（ZOOM）＊要事前予約。

入場：1,100円

＊参加費の一部はLGBTQIA+コミュニティ支援に寄付されます

TEL: 03-5489-7277 | www.a-i-t.net

9 Rocky Shore

祈りと瞑想 - 内海昭子、オラワン・アルンラク、シリル・ポルシェ、セバスティアン・ルセニエ、トラン・ミン・ドゥック、松下沙織

ニューノーマルの生活で、健康や自分自身の内面について考え直すきっかけになった人は多いのではないのでしょうか。今回、祈りと瞑想をテーマに、世界各地の作家の作品とともに鑑賞者の方々が自身の内面を旅できるような企画を目指しています。



日時：令和3年1月30日（土）—3月27日（土） 13:00-18:00

会場：Rocky Shore | 東京都目黒区三田2-7-7 エステート三田105

入場：無料

休日：日／月／火曜日

TEL：070-2663-5063 | www.rockyshore.tokyo

10 アートフロントギャラリー

大岩オスカー 隔離生活

2020年春からNYで「隔離」生活を強いられた大岩オスカー。人のいなくなった街、訪れる予定だった国から「旅に出よう！」と空想の旅が始まります。一方でコロナ禍の社会の現状を訴え、かつ人間や動物を温かいまなざしで描く、日記風のシリーズです。



ART FRONT GALLERY

日時：令和3年2月5日（金）—3月7日（日）

水／木／金 12:00-19:00

土／日 11:00-17:00

会場：アートフロントギャラリー | 東京都渋谷区猿楽町29-18 ヒルサイドテラス A棟1F

入場：無料

休日：月／火曜日

TEL：03-3476-4869

www.artfrontgallery.com

お問合せ

【恵比寿映像祭に関するお問合せ】 ※ 報道・媒体関係者様のお問合せに限らせていただきます。

恵比寿映像祭担当（東京都写真美術館）：柳生（やぎゅう）、坂元（さかもと）

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

TEL：03-3280-0034／FAX：03-3280-0033／E-mail：yebizo_press@topmuseum.jp

【プレスリリース/広報用画像/ご取材に関するお問合せ】

恵比寿映像祭プレスコンタクト担当 株式会社ジュンプロモーション：小原（おばら）、川上（かわかみ）

TEL：03-3402-5136／FAX：03-3479-1246／

携帯（小原）：090-9854-9542、（川上）：080-3003-6684／E-mail：info@junpro.co.jp

※ 本リリース内で使用している写真を広報用画像としてご用意しております。

ご希望のプレスの方は、①ご希望画像の作品名 ②貴媒体名 ③掲載予定時期
を表記のうえ、上記のプレス担当者までご連絡くださいますようお願い申し上げます。

※ 2021年1月に第3弾の作家・プログラムの詳細決定後、3次リリースを発表予定です。

【第13回恵比寿映像祭 公式ウェブサイト】

第13回恵比寿映像祭「映像の気持ち」の詳細は公式ウェブサイトをご覧ください。

www.yebizo.com

※出品作品および出品作家など事業の内容については、変更する場合があります。

※新型コロナウイルス感染拡大状況、その他の事情により、実施内容が変更となる場合があります。予めご了承ください。